



早稲田大学名誉教授 菅野 純

「吉本隆明詩集」思潮社

私が吉本隆明の詩集に出会ったのは、故郷の仙台で大学浪人をしていた18歳の頃だった。当時は、学生運動の真っ盛りで「大学解体」が叫ばれ、東大の入試も中止かも知れないと噂されていた時代だった。

山下菊二装丁のやや暗めの感じの詩集のページを開くと、難解な独白のような文章が目飛び込んできた。それらの文章を「背伸び」しながら読み進めていくと、不意に何ともいえないやわらかなこころの表現が現われるのだった。

＊

「涙が涸れる」

きょうから ぼくらは泣かない
きのうまでのように もう世界は
うつくしくもなくなったから そうして
針のようなことばをあつめて 悲慘な
出来ごとを生活のなかからみつけ
つき刺す

(中略)

とおくまでゆくんだ ぼくらの好きな人々よ
嫉みと嫉みとをからみ合わせても
窮迫したぼくらの生活からは 名高い
恋の物語はうまれない

(後略)

「言語にとって美とはなにか」「共同幻想論」「心的現象論」など独創的で論争的な彼の著作は、全共闘世代とよばれる私たちに少なからぬ影響を与えたはずである。そうした思想的論考の奥底に詩人としてのやわらかなこころが流れていることに、私は惹かれたのである。

私が吉本隆明詩集から始まる彼の著作から学んだことは3つある。

- 1 論理的であり、かつ、叙情的である表現をめざす
- 2 自分にとって「これは確かだ」「これについてはどんな責任も負える」といえることをのみを表現する
- 3 衆を頼らず、自分ひとりでもやるべきことをやる

私は、現在、74歳になった。自分は吉本のうたたのように「とおくまで」来ただろうか？と自問することもある。